



2012 ルクセンブルクメモ

道畑美希

ルクセンブルクは、ドイツ、フランス、ベルギーに囲まれた神奈川県ほどの面積の小さな国。でありながら、国民一人あたりの GDP は世界一を誇り、113,533 US\$であるという。ちなみに日本の GDP は、総額では世界 3 位ながら、国民一人当たりで 45,920 US\$で 18 位（IMF のデータから）である。古くは鉄鋼業で栄え、1970 年代の石油危機以降は金融サービス業への方向転換が成功し、ヨーロッパの金融中心として機能してきたことが背景にある。また、EU の源流となる欧州石炭鉄鋼共同体の原加盟国であり、欧州統合を積極的に推進してきた経緯もあり、EU の機関が集まる国でもある。

【生活水準の高い国】

電車でオランダからベルギー経由でルクセンブルク駅に到着したが、市内を走る車が、メルセデス、BMW などの高級車種が多く、お金持ち度を目の当たりに感じることができる。また、ルクセンブルク政府が決めた最低賃金が約 1800€（約 18 万円）と、高いか安いかわからないが、世界的には最も高い水準である。日本の新卒者の初任給やサービス残業など日本の労働環境を鑑みると、この数字も悪くない数字ではないと思われる。

近年では、情報通信、ロジスティクス分野にも力を注いでおり、スカイプ社は同国に籍を置き、Amazon や eBay、また日本の楽天など、情報分野の有力企業が、欧州の拠点をルクセンブルクにしている。税率の低さなど、これらの企業の誘致活動が積極的に行われた成果と考えられる。



《世界遺産にも登録された旧市街と EU 機関の近代的な建物の対比がおもしろい》

【多国籍の人々】

ルクセンブルクの人口は、約 51 万人。そのうちルクセンブルク人は、29 万人で、残りの 4 割が外国、しかも 150 カ国からの人たちが住んでいる。外国人の中でも 8 割を占めるのがポルトガル人で製鋼業のために移民に来た人たちであるという、が彼らもすでに 2 世代、3 世代目となっている。

また、近隣の通勤者と呼ばれるドイツ、フランスからの通勤する外国籍の人たちも多く、国内就業者の 35.8 万人のうち 13.9 万人が通勤者であるという。島国にすんでいる私たちには理解しがたいが、とにかく多国籍であることに驚かされる。

彼ら通勤者たちがルクセンブルクの一人あたりの GDP 額を押し上げているというトリックもある。

地理的にもローマ帝国時代からヨーロッパの中心とされ、そのために大国から侵略に何度も遭う歴史を持つが、そのたびに、ルクセンブルクのアイデンティティを明確にしてきたに違いない。食文化を見ても、フランスなのか、ドイツなのか、ポルトガルもあり、イタリアもあるなあと、多様な文化が重なり合った印象を受ける。



<<街の中心部 ギョーム広場での青空市 >> <<後述の卸売市場に停車する車、こんな高級車で来るか?!>>

■ルクセンブルクの農と食

【農業の概要】

ルクセンブルクの農業人口は 5 千人、農家数は約 2,000 軒と、ルクセンブルクの統計にある。GDP に占める農業生産額も 0.2%ほどである。が、ルクセンブルク市内を一步出れば、牧場や牧草地の田園風景が広がり、南東部のモーゼル川流域は、良質な白ワインの生産で有名である。

牛の肥育農家、養蜂家、ワイナリー、そして乳業メーカーなどを訪問したが、訪問先の話聞く限りでは、周辺農業大国からの安価な農産物や加工品との競合において、農業で生計を立てるのはかなり厳しい状況であるようだ。ワインのような付加価値の高い商品にしてこそ、農業も成り立ちうる状況にある。

○養蜂家 Paul Jungels さん 54 才 Brandenburg 在住 apisjungels@vo.lu

おじいさんが農業をやっていて、3 代目。お父さんは 20ha の畑をもち、畜産をやっていたが、自分は養蜂を始めた。巣箱は 900 ケあり、一つのコロニーから 30kg ほどのはちみつがとれる。年間 200~300kg の生産。ちょうど大学生の息子がいて、通訳をしてくれる。

(といっても Paul さんの英語は私より上手なだけで・) 息子は IT 関係のことを学んでいて養蜂業は継ぐ気はないと話していた。彼の姉に当たる娘は、イギリスに留学し英文学を学んでいるといい、ちょうど私たちが訪問した時に帰省していた。

はちみつは、スーパーでも同様のパッケージのものが並んでいた。EU の有機認証マーク入り、この瓶とパッケージがルクセンブルク国産蜂蜜の証。上蓋に、養蜂家の名前がプリントされている。Paul さんによれば、ルクセンブルク国内に 300 農家の養蜂家がいるが、プロフェッショナルは、自分も入れて 3 軒ほどとのこと。



◀◀小さなショップも併設。奥様は市場に売りに出ている。500g で 8€ だったかな。上に名前が書かれている ▶▶

○牛の肥育農家 Andreus さん 31 才 Luxembourg 市郊外

65 才のお父さんと一緒に農業をやっている。自分はパートタイムで会社に勤めていて家畜の栄養関係の仕事をしている。100ha をもち、牛は 8~10 か月で 300kg になるが、それから 12 から 20 か月で 450kg に育てる。50~60 頭の牛を育てているが、売価は、相場にもよるがたいだいキロあたり 3€ ほど。補助金がないとやっていけない。飼料となる干草の価格は、100kg で 30~50€、小麦工場からでる副産物(ふすま?)は 100kg で 20€、お金がかかる。規模を拡大するにも土地は高い (ha あたり 6,000€) し、景観についての規制もあるので、簡単にはいかない。とはいえ、私たちが訪問した時には新しい畜舎を建設中だった。

生産者の組合があり、その組合で、ルクセンブルクのスーパーマーケットに買ってもらっている。世界的な価格に競合していくのは難しい。ちなみに乳牛について、牛乳の買い取り価格は、1ℓあたり 30~32¢、生産のためのコストは、42¢ という。補助金頼みの構造である。Andreus さんは、未婚。結婚しないのか聞いてみると、農家に嫁は来にくいという。農業大国に挟まれた国にあつて、農業は厳しい状況のようである。



〈〈なかなかイケメンなのになあ・・市内からも近いし、なぜ嫁に来ないの～、モウ～〉〉

○ワイナリー Anouk Bastian さん Matias Bastian オーナー Remich(モーゼル川流域)

モーゼル川沿いの斜面に沿って広がるぶどう畑。丘の上にワイナリーの建物がぼつぼつ見える。訪問した Bastian のオーナーは 4 代目で女性。ドイツで法律の勉強をし、弁護士をしていたのだが、家の継いで今あるという。小学生のお子さんもいて素敵なママ社長だ。

年間 9 万本のワインを生産しており、その内の半分がレストランへ販売、その他はワイン店、スーパーなどへ販売しているという。ここのワインは、秋から東京の伊勢丹でも販売されるらしく、日本へのマーケティングには興味がありそうであった。約 30ha の畑を持ち (5.5ha, 8ha, 14ha とあるそうだ)、無農薬(生物農薬)で栽培をしている。今年は 6 月の低温で、ぶどうの出来に影響があると、また、私たちが訪問したときは例年より暑い気候で、それも気になるとのこと。近年の気候の変動は、少なからず影響を与えているらしい。

ワイン・クレマン振興協会 <http://www.vins-cremants.lu/en/home/index.html>



〈〈 素敵なバ스티アンさん〉〉 〈〈 シェンゲン条約の地、モーゼル川に船を浮かべて調印したそうだ〉〉

【行政 食品安全機構品質安全機構 (OSQCA)】

Strotter Camille 氏 (機構長) と Welschebillig Nathalie 氏 (副機構長、女性の獣医)

ルクセンブルクには、食品の安全を司る専任の機関がなく、それまで農業省と厚生省が共同で月に一度の会議などを行って食品安全行政をやっていたが、2007年にこの OSQCA ができて、食品の安全 (ほか、農業技術、家畜の動物福祉など) を担当している。といってもスタッフは3名! だそう。多くは、EU の基準に準拠していて、ルクセンブルク独自のものというものはなく、今まで見てきたはちみつや牛肉の認定マークについては、生産組合独自のモノ、民間のものであるようだ。また、ワインのような付加価値が高く、輸出商品として位置づけられるものは、以下の農業省が関わっているようである。

ルクセンブルクは、小さな国で、大公の宮殿も首相官邸も思った以上に小さく (それに警備も重々しくない)、大きな行政府を構えるより、食品や農業など、あまり金儲けにならない部分では、小さな政府を目指し、EU に乗っかるかかちで進めているのかなと感じた。税関も国境もない EU 内では、独自の基準という線引きもしにくいだろう。ここで聞いた話でおもしろかったのは、鶏のと畜場が国内にはなく、ベルギーのと畜場で処理しているということ。それだけ、線引きがないということだろう。



〈〈お二人ともとても親切 吊りズボンのおやじは東大川島先生〉〉〈〈ルクセンブルク産牛肉のマーク〉〉

ルクセンブルクには農業省があって、農業、ワインそして農村開発の3本軸が農業省のサイトに掲載されている。環境面での持続性を維持しつつも、農村開発、また農村観光政策にも力をいれているようだ。国家戦略計画に農村開発が位置づけられており、サイトには、以下の通り書かれている。「2007~2013年のプログラム機関に、農村開発のための欧州農業基金 (EAFRD) から90万ドルを含む3.685億ユーロの予算が投資される」と。日本での6次産業化のように、1次産品以外にも付加価値の高い農業を目指すべくプログラムが用意されているようだ。(これは次回ルクセンブルク訪問の宿題)

【食品メーカー LUXLAIT(乳業メーカー) Vitarium という工場に併設する見学施設】

生産者組合形式の乳業メーカーで450の生産者から成る。1年間に1億3千万ℓの牛乳を集め、牛乳、加工乳、チーズなどを生産しており、売り下は、8千万€とのこと。61%を輸出しているという。スーパーに行けば、このブランドの牛乳が並んでいる。おそらく、スーパーのPB商品も製造している様子である。



《手前が工場、奥に見学施設がある》



《スーパーのPBも製造しているもよう》

【食品流通】

フランスのカルフル、ベルギーのデレーズ、CORAなどが進出している（国境もないので進出というほどでないが）。地元ルクセンブルクのCACTUSは、先述した牛農家の組合が卸しているという。他国産よりも少々高い価格で売られており、ルクセンブルク産とわかる緑のマークもついている。地元のスーパーが、高く買ってあげるとするのは、日本の大手流通業からは考えられない。イオンやヨーカドーも考え方を変えた方がいい。

○スーパーマーケット CACTUS

その地元スーパーCACTUSへ行ってみたが、ハイパーマーケットのような大きさ！こちらは、車社会なので、皆、いろいろなものをワンストップショッピングで買っていく。他のヨーロッパ諸国のように惣菜といえば、ハムやチーズ。スーパーのケータリング部門やケータリング会社が惣菜を販売している場合もあるようだ。ルクセンブルクの家計調査を見ると、外食にもかなりお金をつかっているようだ（宿泊費などと一緒になって具体的な数字は不明）が、ケータリングも主流なようである。従業員数のランキングをみると、ケータリング会社が上位にランキングされている。

スーパーの商品を見ると、生鮮品も加工品も周辺国からのものが多い。量産型のフランス、ドイツ、オランダなど、加工品をみると、やはりルクセンブルク産のものは割高感がある。国境もないし、消費者はあまり気にしていないのかもしれない、となると、農業の状況の厳しさがスーパーの売り場からも見えてくる。

○ホールセールクラブ Le Halle de Luxembourg

国境なし、小さな国ゆえ、日本でいう卸売市場のようなものはないようで、民間企業でホールセールクラブがその機能を果たしている。Le Halle de Luxembourg は会員制で、ここに仕入れに来るスタイルもあれば、配送もしているようで、この名前を書いた車を街中でよくみかけた。多国籍の人々が住むところだけに、食材は豊富。こういった業態とスーパーが中間流通業の役割を果たしているようだ。また、街中では、ファーマーズマーケットのような市もたつ。



《Cactus 魚介類も新鮮》



《ホールセールクラブは、近隣の国からの野菜も種類も豊富》

【美食の国 ルクセンブルク】

ルクセンブルク人の趣味は、旅と美食。家計に占めるホテルとレストランへの支出も約7.7%は高い数字。フランス、ドイツ、ベルギーに囲まれ、ポルトガル、イタリアからの移民の持ち込む食文化も交わり、「マルチ文化のいいとこどり」みたいな食文化が形成されている。ミシュラン星の数は、面積当たりで1番で、13の星レストラン、14の星があるそうだ。そのなかのひとつ、シャトー・ブリングリンスターを訪問。名の通りお城にあるレストランで、入口が二つあって、あちらは星レストラン価格、こちらはお手頃価格とユニークなつくり。中央にキッチンがあって、両方のものを調理しているのだから、お手頃はさぞやお買い得だろうと予想がつく。まさにお手頃、3人のコースとワイン1本で175€は、お買い得で、大満足。



《オーバーワイスの美しいケーキ》《ルクセンブルクの肉まんともいうべき、パテ・オ・リースリング》